

アレクサンドリアのフィロン

『世界の創造』——モーセによる「世界創造」について

(第五章三六節—第九章八八節)

野 町 啓・田 子 多津子

【はじめに】

今回訳出した部分は、『哲学・思想論叢』第六号（一九八八年三月、一一七頁）に訳出した部分に続くもので、『創世記』第一章六一—三二節の記述と対応し、七日間の創造のうちの第二日から第六日にあたる。フィロンのいわゆる二段階創造論の文脈の中では、第一日のアイデア界の創造に続いて、可視的世界が造られていく過程が叙述されてくる部分であり、人間の創造も含まれている。

なお、翻訳に際しては、*Philonis Alexandrini Opera quae supersunt*, ed. L. Cohn, P. Wendland et J. Reiter (Indices: J. Leisegang), I—VII, 1886—1930の第一巻を底本として用いた。訳文中の節番号はこれによるが、章については、底本の区分がかなり細かいため、以下に挙げる Arnaldez の仏語訳の章分けを主として参照しつつ、内容と照らし合わせて訳者が適宜区分した。その他 J. G. Müller, *Des Juden Philo Buch von der Welschöpfung*, Berlin, 1841; L. Cohn, *Die Werke Philos von Alexandria in deutscher Übersetzung I*, Berlin, 1909; A. H. Colson, G. H. Whitaker, *Philo I*, The Loeb Classical Library, Cambridge, Mass., 1929, repr. 1971; R. Arnaldez, *Les œuvres de Philon d'Alexandrie I*, Paris, 1961 を参考にした。本文中の（ ）は訳者による補いを示す。

五 — 第二日 —

(三六) さてこのようにして、非物体的世界が、神のロゴスのうちに位置づけられ、完成すると、可感的世界がこの非物体的世界を手本として成就されていくことになる。

そこでまず第一に、造物主は、^{ホ・デーミウールゴス}可感的なものの諸部分すべての中でもとりわけ最上の部分である天を造り、その天を、それが物体的なものであるがゆえに「おおぞら(天空)」「*στερεώμα*」と名づけたが、それは実に真実になつたことである。というのも、物体(*σώμα*)とは、本性上立体(*στέρεον*)であり、まさしく三方向に広がりを持つ(三次元の)ものだからである。じつさい、立体および物体の意味として、あらゆる方向に広がりを持つということ以外に何か他に考えられるだろうか。したがって造物主は、この可感的なものを、適切にも可知的で非物体的なものと対比したうえで「^{ス・テ・レ・オーマ}おおぞら」と呼んだのである。(三七) 次いで、造物主は、ただちにそのおおぞらを「^{ウ・ラ・ス}天」と呼んだが、それもまた正鶴を射ており、実に語義になつている。というのも、「天(*οὐρανός*)」とは、万物の境(*ὄρος*)でもあり、可視的なもの(*ὄρατος*)のうちに生じたものでもあるからである。^(一)

そして造物主は、天が生成した後、その日を「第二日」と呼び、可感的なものの中で占める天の価値と尊厳とに鑑み、一日分全体の間、つまり長さを天(の生成)に充てたのである。

六 — 第三日 —

(三八) さて大地の方はというと、まだ水という水が限なくそれを覆っており、そのすみずみまで浸透していた。大地は、あたかも水分を吸い込んだ海綿の様相を呈し、泥と深いぬかるみになつていた。(水と土の)^{ス・ト・イ・ア}両要素は、練りもののように混ぜ合わされこねられていて、区別しがたい形定まらぬ一つのものとなつていた。

そこで神は、塩辛くて穀物と樹木の結実を妨げかねない水は、大地のいたるところにある割れ目から流れ込んで集まり、乾いた地が現れるよ

うに命じた。⁽⁵⁾ 他方、甘い水（塩分を含まぬ水）は、乾いた地の保持のために残された。というのも、甘い水は、適量ならば離れた部分どうしを繋ぎ合わす一種の膠の働きをするからである。神がこのようにしたのは、大地がすつかり乾ききつてしまつて、実を結ぶことなく不毛とならないようにするためであり、また、ちょうど母親が子供になすように、大地が固形食一種類だけではなく、それとあわせて飲物の方も与えるようにするためであつた。そこで神は、大地を、乳房のような多くの水脈で満たし、その水脈は一たび口を開いて水を注ぎ出すと、川や泉になる。⁽⁶⁾（三九）また同様に神は、穀物の豊かな実りをもたらすために、目に見えない水路も、深く肥沃な大地全体に張り巡らしていった。神は、このように配置し終えたと、乾いた地の方を「陸」、それから切り離された水の方を「海」と呼び、名を与えたのである。⁽⁶⁾

（四〇）次いで神は大地を秩序づけ始める。神は大地に命じ、草木は芽を吹き、穀物は穂を出し、あらゆる種類の草が生え、肥沃な野となり、そして、将来獣の餌や人間の食物となる一切のものが生じるようにしたのである。そればかりか、さらに神は、野生のものも、いわゆる栽培されたものも、何一つ漏らさずあらゆる種類の樹木を生えさせた。しかもこれらはすべて、今の有様とは反対に、初めて生えるやたちまち実をたわわにつけていた。

（四一）というのも、今では、生育するものは順次時を追つて生長し、決して同時期に一挙に生じることはないからである。周知のように、まず種が蒔かれ、苗が植えられる。そして、蒔かれたものと植えられたものが生長していく。その際、下に向かつては支えのように根を伸ばし、上に向かつては、頂を目指して伸びていき幹となる。次いで芽が出、葉が繁り、そして最後に実を結ぶのである。だが、実は初めから熟しているのではなく、大きさという量の点でも多様な形状という質の点でもあらゆる変化を経る。つまり、実は、小さくてほとんど目に見えるか見えないほど微小な切片に似た形でまずつく。それを「最初に感覚されるもの」といつてもあながち不当ではないであろう。この後木を潤している養分が管を通つて浸透し、さらに、冷たく穏やかな風に活気づけられ育まれた調和のとれた大気に恵まれて、実は成熟の域にまで徐々に大きさを増していく。⁽⁷⁾ 大きさが変わるとともに、ちょうど絵の技法によつて様々な色づけがなされるように、質も変容していくのである。

（四二）神は、私が先に述べたように、万物の最初の生成の際、植物をことごとく大地から完全な状態で生み出したのであり、果実は未熟どころか完全に熟していた。それは、植物に次いでただちに生まれるはずの動物が、目の前にある実をすぐにでも食べて楽しむことができるよう

にするためであつた。

(四三) さて、神は大地にこれらのものを生むように命じた。すると大地は、あたかも長い間はらんで陣痛に苦しんでいたかのように、すべての種類の蒔かれたもの、ことごとくの木、さらに無数の種類の果実を生んだのである。

だが、果実は、ただ動物の餌であるばかりでなく、同種のものとの絶えざる生成の備えでもある。つまり、果実は種子スベルマティコス・ウーレアとしてのあり方を内包しており、その中に木全体のロゴスがあつて、初めはまだ隠れて見えない状態にあるが、やがて季節が巡つて来ると現れ出て見えるようになるのである。⁽⁸⁾ (四四) それは、神が、自然に往復反転の過程をとらせ、種を不滅なものにし、永遠に与らせようとしたからである。そのために、神は、「初め」を導いて「終わり」へと至らせもすれば、また、「終わり」を「初め」に戻るようにもした。じつさい、樹木から果実が生じるが、それがいわば「初め」から「終わり」に至る例にあたり、また、自らのうちに種子を含んでいる果実から今度は樹木が生じるが、これがいわば「終わり」から「初め」に至る例に相当するといつてよからう。

七 —— 第四日 ——

(四五) 神は、地の後、第四日に天を秩序づけ、色彩(星辰)をちりばめていった。もつとも、神は、天より劣つた本性である地に優位を与え、より優れて神的な天を第二義的なものとみなして、天を地の後に配置したのではなく、自らの統治者としての権能をはつきり示威するため(9)にそうしたのである。というのも、神は、まだ生まれていない人間たちについて、彼らがどのような物の見方をするかを見越していたからである。つまり、彼らが目指すものは、純粹な真理ではなく、筋が通り一応説得力はあつても上辺だけのものであろう。彼らは、知恵ソフィアよりもむしろ似非知識ソウイスタガに賛嘆し、神より(天界の)現象の方を信ずるようになり、太陽と月の周行を見、それによつて夏・冬、春・秋の循環クワダが惹き起こされ、毎年大地からすべてのものが生ずることの原因は天の星々の回転なのだ(10)と推し量ることになるであろう。

そこで、人間の中から、破廉恥極まりない不遜さや極度の無知ゆえに、被造物に第一の原因を帰する者が出てこないようにと配慮して、神は次のように言うのである。(四六)「人間たちよ、万物の最初の生成の時に思いをいたせ。その時大地は、太陽と月が生ずる以前にあらゆる植物とあらゆる果実とを生み出したのだ。このことを心で観たならば、こう望むがよい。大地が今後も父の命令に応じてあらゆる植物や果実を生み

出すようにと⁽¹²⁾。これは父(なる神)の御意によるのであり、父は、(生成にあたって)天上にある子孫(星辰)を何ら必要としない。父は天にある子孫たちに、なるほど諸力を与えはしたが、自分で裁量する権限を委ねはしなかった。じつさい神は、御者が手綱を、船乗りが舵を取って思う方向に進むように⁽¹³⁾、他の何ものも必要とせず、法と正義に従って各々のものを導くのである。というのも、神は万能だからである。

(四七) このようなわけで、まず先に地が植物を生み出し、芽を出させた。次に、天があらためて完全数「四」⁽¹⁴⁾で秩序づけられていったが、この数「四」を完全包括数⁽¹⁵⁾「十」の出発点であり源泉であるといったとしても、それほど当を失してはいないであろう。というのも、思うに「十」は完全現実態⁽¹⁶⁾において完全数であるのに対し、この(一、二、三を含む)数「四」は可能態⁽¹⁷⁾において完全数だからである。⁽¹⁸⁾つまり、一から四までの数を次々に加えるならば、これらの数が十を生むことになり $1+2+3+4=10$ 、しかも、この十は無限に続く数の境界をなし、これをいわば折り返し点として数は一巡りして戻っていくのである。⁽¹⁹⁾

(四八) さて、この数「四」は、音楽上の響和——つまり四度、五度、一オクターブ、さらに二オクターブの響和からなり、ひいてはこれらから最も完全な音階が生み出されるわけだが——の基になる比例関係をも含む⁽²⁰⁾。すなわち、四度による響和の比は $1:1\frac{1}{2}$ 、五度による響和の比は $1:1\frac{2}{3}$ 、オクターブによる比は $2:1$ 、二オクターブによる比は $4:1$ である。そして、数「四」は、こうした比例関係すべてを、つまり四対三の形で一と三分の一を、三対二の形で一と二分の一を、二対一ないし四対二の比の形で二を、四対一の比の形で四を、それ自体のうちに含んでいるのである。

(四九) さらに、数「四」にはまた別の特性があり、それを考えるにつけ語るにつけ、ただただ驚嘆するほかはない。というのも、数「四」に先立つ数(一、二、三)は非物体的なものに対応しているのに対し、数「四」は初めて立体の本性を示すものだからである。つまり、二は一の流れによって、線は点の流れによってできるのであるから、幾何学でいわれるところの点は一に、線は二に、それぞれ順に対応している。ところで、線は本来幅のない長さである。だがそれに幅が加わると面になり、面は三に対応している。面が立体の本性を持つには、いま一つ、つまり深さが加わらなければならない。⁽²¹⁾ (一)「点」、二「線」を含む(三)「面」に深さが加わると四が生ずることになる。

こうしてみると、この数「四」は多大な意義を持つことになってくる。まさにこの数「四」によって、われわれは、非物体的かつ可知的存在

から三次元の広がりを持った物体に思い至るのであるが、これこそが、その本性からしてわれわれが最初に感覚しうるものなのである。

(五〇) ところで、今述べたことでまだわからない者も、ごくありふれた遊びの例を出せば納得するであろう。木の実遊びをする人は、ピラミッド型を作ろうとして、通常、地面にまず木の実を三つ並べ、さらにその上にもう一つ置く。すると、地面の上(平面上)の三角形は三になっているが、さらにその上加えた木の実は、形のうえでではもうそれだけで立体をなすピラミッド(四面体)を生み、数のうえででは四を生むことになる。

(五一) これに加えて、次のことも銘記しておかなければならない。すなわち、四は、数のうちで同数の掛け合わせによってできる最初の平方数であり、正義と平等の尺度である。⁽²⁰⁾ さらに四は、本性上、 $2+2$ という同数の加法によっても、また 2×2 という同数の乗法によっても生ずる唯一の数であって、申し分のない調和の一形態を示すものであり、他の数はどれをとってみても、こうした属性を持つものは何一つとしてない。例えば、六をとってみても、なるほど三と三の和ではあるけれども、三と三を掛け合わせると、六ではなく、それとは別の九が生ずるのである。

(五二) さらに、数「四」には、このほかにも多くの権能があり、それらのいちいちをより厳密に明らかにするには、あらためて数「四」に関する別の一章をあてなければならぬ。⁽²¹⁾

だが、ここでは次のことを指摘するにとどめよう。まず数「四」は、天と世界全体の生成にとって始原であった。というのは、この万有が造られた際、そのもとになった四元素は、たとえていえば、あたかも泉から流れ出るがごとく数「四」から出ているからである。さらにこればかりか、一年は冬・春・夏・秋の四つに分けられるが、この四季があるからこそ動物や植物が生まれ育つのである。

(五三) したがって、今語られた数「四」は、自然においてこうした格別の地位を占めるにふさわしい。それゆえ第四日に、創造者が、光芒を放つ星々という、美しさの点でも神性の点でもこのうえないものを配して天を飾っていかうとしたのも当然のことなのである。

さらに存在するものの中で光が最善のものであることがわかっていたので、創造者は光を、感覚のうちで最上のものである視覚の道具とした。というのも、身体において、魂における知性^{ノウシス}に相当するのが、まさしく目だからである。つまり、知性は可知的なものを、他方、目は可感的なもの、それぞれ見る。また、知性は非物理的なものを知るために学識を必要とし、目は物体を把握するために光を必要とするが、この光は、

人間にとって、他の多くの善きもの原因であるのみならず、とりわけ最大の善きものである哲学の原因なのである。⁽⁵²⁾

(五四)つまり、光が目を上方向へと向かわせると、視覚は、星々の本性やその調和ある運動、すなわち恒星と惑星の整然たる運行を見て取る。恒星は同一の軌道を一定の方向と早さで回転し、惑星の方は、それぞれ軌道が一定せず、逆向き⁽⁵³⁾の二つの円運動に支配され運行している。さらに、星々の本性や運動に加えて、完璧な音楽の法則によって秩序づけられた調和のとれた星々全体の輪舞⁽⁵⁴⁾を視覚が見て取ると、魂に言葉では言い尽くせない喜びと快を与える。魂は次々と新しい様相をみせる光景を供せられ、観想への飽くことのない欲望を抱くのである。そこで魂は、その本性からして、次のような問いを執拗に問いつめていく。目で見ていたもの(星々)の本質とはいったいどのようなものか、また、星々は本来不生なのか、あるいは生成の始まりがあったのか、そして、その運動の仕方はどのようなものであるのか、個々の星々はどのような原因によって統べられているのか。まさにこうした問題の探究から哲学は生じたのであり、人間がかかわる事柄のうちで、哲学よりも完全な善きものはないのである。⁽⁵⁵⁾

(五五)さて神は、非物体的世界に関して先に言及しておいた可知的光というかのアイデアに目を向け、完璧な美を備えた神的な像としての可感的な星々を造り、それらを、あたかも物体的本性を持ちながらこのうえなく浄らかな聖所に置くかのように、天に配したが、それには次のような種々の理由があつてのことである。すなわち、星辰が光をもたらし、目印となり、さらに年ごとの四季の巡りや、とりわけ日、月、年の句切りとなるためであつた。これこそがまさに時の尺度となり、また数というものを生む元になつたのである。

(五六)今述べた星々の一つ一つがどのような恩恵や利益をもたらすかは、まったく自明のことではあるが、いつそう正確な理解を期するたために、言葉を重ね、真実をたどつてみても当を失することにはなるまい。

まず、父なる神は、およそ時というものの全体を昼と夜の二つの部分に分け、そのうえで、昼の支配をいわば偉大な王に委ねるかのように太陽に、他方、夜の支配は月やそれ以外の星々の一団に委ねた。(五七)太陽の帯びている力と支配権の偉大さには、すでに述べたように、あまりにも明白な証拠がある。つまり、太陽は、唯一ただそれだけが単独に時全体の半分、すなわち昼をその領分としている。これに対し、月を含めたそれ以外の星々は、全部で、夜と呼ばれているいま一つの部分を領分としている。しかも、太陽が昇ると、それまで見えていたあれほど多くの

星々が、光薄れていくばかりか、太陽の光の広がりともに見えなくなるのであり、星々がこそつて固有の光を放ち始めるのは、日が沈んでからである。

(五八) さらに、星々が造られたのは、モーセが述べたように、単に地上に光を送るだけではなく、将来の出来事の兆しをあらかじめ格好な時に示すためでもある。つまり、星々の出没盈虚や、あるいはまた、季節ごとの星々の見え隠れやその他星々の運動にまつわる様々な(位置の)変化から、人々は将来の出来事を予測する。例えば、穀物の出来・不出来、家畜の繁殖と死滅、天候の良し悪し、風が止むか嵐となるか、河が氾濫するか干上がるか、海が凪ぐか時化するか、あるいは、寒風吹きすさぶ夏や炎暑の冬、秋のような春や春のような秋といった不順な季節の巡りを、人々は予測するのである。(五九)これにとどまらず、人々は天に見られる様々な動きから推測して、大小の地震やその他無数の異変を予知する。したがって、聖書に、星々は「しるしのために生じた」(創、一・一四)と述べられているのは、まさに真理の極みである。さらに続けて、聖書の中で、星々は「季節のために生じた」ともいわれている。その場合、季節とは四季のことをいっているのであるが、それは故なきことではない。というのは、季節は成就の時にほかならないからである。四季に応じ、穀物は種蒔かれて育ち、動物は生まれ成長し、万物が完成へともたらされるのである。

(六〇) さらに、星々が生じたのは、時の尺度となるためであった。つまり、太陽や月や他の星々の秩序づけられた周行によって、月や年が成立した。すると、ただちに数というこのうえなく有益なものが生じたが、それは、時が数というものを開示したからにはほかならない。というのも、一日から一(という数)が、二日から二が、三日から三が、一ヶ月から三〇が、一年からは一二月分の日数と総計で等しい数が、そして、無限の時から無限の数が生ずることになったからである。(六一)天にある星々の本性と運動は、これほど多くの、これほど不可欠で有益なことにまで及んでいる。だが、これ以外のどれほどにまで星々の本性と運動が及んでいるか、それは私には述べ尽くしがたい。というのも、死すべきものがすべてを知ることとは不可能である以上、われわれには明らかにされていないことがあるからである。とはいえ、それらは宇宙の維持のためにともに働いており、その働きは神が不動のものとして万有の中に定めた掟テスモイノモイと法に従って、至るところ、あらゆる仕方で遂行されているのである。

(六二) そこで、地と天がそれぞれ、前者は三日目に後者は今述べたように四日目に、似つかわしく飾られて完全に整えられてしまうと、神は、第五日目に、死すべき種族を命あるものとして形づくることに着手し、まず初めに水に棲むもの（水棲動物）から造り始めた。それは、生き物と数「五」ほど相互に同族的なものほかに何もないと考えたからであつた。この場合、生命あるもの（動物）は、まさに感覚の点において生命を欠くものと異なっているからである。この感覚は、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五つに分けられる。創造者は、個々の感覚に、特別の素材（感覚対象）と固有の基準（感覚器官）とを配し、それを用いて各感覚はそのもとに生じたことを判断する。つまり、視覚は色を、聴覚は音を、味覚は味を、嗅覚は匂いを、そして触覚は硬いか柔らかいか、熱いか冷たいか、滑らかか粗いかを判断するのである。

(六三) さて神は、場所に依じて大きさも性質も異なるあらゆる種類の魚や海獣が生ずるように命じた。海が違えば種類も異なるが、異なつた海に同じ種類のものがあることもある。とはいへ、どこをとつてみてもあらゆる種類のものがあるように形づくられたわけではなく、それは故あつてのことなのである。

つまり、ある種のものほど深くないどろどろした海を好み、また、陸に上がることもできなければ、かといつて岸から遠く泳ぎ出すこともできず、入り江や湾を好むものもあり、さらにまた、沖合の深い海に棲み、突き出た岬や島や岩場を避けるものもある。あるいは、好天と海の穏やかさに育まれるものもあれば、荒波と逆巻く潮にもまれて育つものもある。実際、この潮にもまれて育つ類は、絶え間なく波に打たれながらもそれに抗い、そうすることによつて鍛えられ、いつそう逞しくなり、脂も乗ってくる。

神はまた、この水に棲むものの兄弟として——というのも、魚も鳥も共に泳ぐものであるから——翼あるものの種族をも造つたのであり、空を飛ぶものの種族のどれ一つとして不完全なままに残すことはなかった。

(六四) 神は、水と空がそれにふさわしい生き物の種類をいわば自分に固有の取り分として引き受けてしまうと、生き物の中で植物のほかに陸上（陸棲）動物がまだ残されていたので、あらためてその残っている部分を生むように地に命じて言った、「地はそれぞれの種類にしたがつて家畜と獣と這うものをいませ」（創、一・二四）と。すると地は、即座に命じられた通りに、形姿においても力においても異なる動物を生み出し

たが、その中には、それらに本来備わっている能力が人間にとって害になるものもあれば益になるものもある。

(六五)ところで、神は、こうしたものすべての後で人間を造ったわけだが、その子細については少し後で述べるつもりである。それに先だつてまず明らかにしておきたいのは、神が、絶え間のないすばらしい連鎖を用い、それに従つて生き物(魂を持つもの)の創造を統御しているということである。つまり、神は、魂のうちで活力が最も低くしごく単純なものを魚の種族に、それに対し、このうえなく精緻であらゆる点で最善のものを人間の種族に、そしてこの両者の中間に位するものを陸に棲むものと空を飛ぶものに割り当てた。この中間に位する魂は、魚の魂より鋭敏な感覚を持つてはいるが、人間の魂に比べるとかなり鈍いからである。

(六六) こういう次第で、神は生き物のうちでまず最初に魚を生んだわけだが、この魚なるものは魂よりも物体的本性に与るところが多い。したがつて、魚は、ある意味では生き物ともいえれば生き物でないともいえ、動きはするが魂を持たないのも同然で、ただ身体を維持するためだけに魂めいたものが魚にばらまかれている。それは、ある人々が言うように、肉にとつての塩のようなもので、肉が容易に腐らないようにするにすぎない。魚に次いで、神は空を飛ぶものと陸に棲むものとを生んだ。というのもこれらは、より鋭敏な感覚を持つばかりか、その体軀からしても魂を有するという特性をより判然と示しているからである。そして最後に、前述のように神は人間を生み、人間には選り抜きの贈り物として、目の中の瞳にあたる魂の中の魂というべき知性を与えた。なぜなら、この瞳を、事物の本性をより厳密に探究している人々は、目の中の目と言っているからである。

(六七) さて実際には、創造に際して万物は一挙に構築された。だが、万物は一挙に構築されたとはいへ、以後生物が自分たちで繰り返していく生成のために、やむを得ず、言葉のうえで万物の秩序を追つてその概略を述べてきたのである。個別的に生ずるものについてみれば、その成長が最も低次なものから始まつて、すべてのうちで最も高次なものに至るといふこと、これが秩序なのである。それが具体的にはどのようなものであるかを明らかにしておかなければならない。生き物の生成は精子から始まる。その精子が泡に似た最下等なものであることは瞭然である。しかし、精子がひとたび子宮に射出されて固着すると、ただちに運動し始め、生育していく。生育は精子より優れているが、それは、生まれ育つものにあつては運動は静止よりも優れているからである。さらに、この生育という働きは、あたかも工匠、もつと正確にいえば彼の完璧な技術のように生き物を形づくっていくが、湿つた要素(体液)は身体の四肢や各部に振り分け、気息的な要素は魂の諸能力、すなわち養育

的能力と感覚的能力へと振り分けるのである。ただし、思考能力については、それが神的で永遠的なものなので、外から（魂に）入ってくると主張する人々がいるから、⁽³³⁾ここでは後の問題としておかなければならない。

（六八）したがって、生育は取るに足らない精子に始まるが、きわめて高級なもの、つまり動物や人間の身体の構成に終わるのである。まさしくこれと同じことが万有の生成においてもみられる。つまり、造物主が生き物を形づくるのをよしとした際、まず最初に秩序の上からみ取るに足らない魚が、最後に最善の人間がある。そしてこの両端の間に前者よりは優れているが後者よりは劣っている他の生き物、すなわち陸に棲む獣や翼あるものがあるのである。

九 —— 第六日 ——

（六九）さて、人間は、すでに述べたように、⁽³⁴⁾それ以外の他のすべてのものの後に、神の似像（ホモイミタシ）人間のイデア）にしたがって、それに似たものとして造られた（創、一・二六）、とモーセは言った。これは実に的確な言葉である。というのも、この地上にあるものの何一つとして人間ほど神に似ているものはないからである。しかし、この類似を肉体の特徴に関するものとみなしてはならない。なぜなら、神が人間の体つきをしているのでもなければ、人間の身体が神に似ているのでもないからである。神の似像といわれるのは、魂の指導的部分（統率者）である知性ノウシスに関するものである。つまり、個々の人間のうちにある知性は、かの一なる万有の知性をいわば原型として、それにかたどって造られたのであって、それが、かの知性を担い、しかもそれを神の像のごとく携えているという意味で、いわば神なのである。換言すれば、偉大なる統率者（ノウシス）万有の知性）が宇宙全体において占める役割を、人間においては人間の知性が占めているように思われる。知性は、それ自体不可視であるがすべてのものを観、また、窺い知れない本質を持ちながら他のものの本質を把握する。さらに知性は、諸技芸や諸学問を駆使してあらゆる幹道を多岐にわたって切り拓き、陸海を経巡ってそこにあるものを精査していく。

（七〇）これにとどまらず、知性は飛翔し、大気とさまざまな現象を子細に観察すると、いつそう高みへと上昇してアイテール界と天の回転を指摘し、そこで知性は、完全な音楽の法則に則って惑星と恒星の輪舞に合わせてめぐる。知性は、知への愛の導きに従いながら、可感的世界

全体を乗り越え、そこにおいて可知的実在を希求する。(七一)そして知性はかの可知的実在において、かつて見た可感的諸事物の範型とイデアというこの世ならぬ美を觀、あたかもコリュバンテス⁽³⁶⁾が憑依状態に捉えられるように飲まずして陶醉状態に落ち、さらに別の願望とより高貴な憧憬に満たされ、それによつて可知的なものに至高の穹窿の頂へと導かれ、まさに偉大な王その人の面前にまで伺候することになる。だが、知性がその王をいかに觀ようと渴望しても、凝縮した光の放つ純粹で清らかな光線が一举に奔流のごとく溢れ出て、その閃光で^{デアノイア}思考能力の目はくらまされてしまう。

ところで本題に戻せば、すべての似像は元となっている範型に似ていてはならず、むしろその多くは類似してはいないので、(六九節の冒頭でみたように)「似像にならつて」の句に添えて「似姿にならつて」の句が付け加えられているのは、(人間が)正確な写しであつて元の形をくつきりと映し出しているということを判然とさせるためであつた。

(七二) さて、いったいなぜ、人間の創造に限つて他の場合と異なり一人ではなくあたかも複数の造物主がいるかのようにされているのか、人が当惑するのもあながち不当ではなからう。実際、万物の父はこのように言っている、「(われわれは)われわれの似像と似姿にならつて人間を造らう」(創、一・二六)と。すると、万物を従える者にとり、自分以外の他の誰かが不可欠なのか。それとも、天と地と海を造つてるときにはいかなる協力者も必要としなかつたのに、取るに足らぬ死すべき生き物(人間)を創造する段になつて、他の者たちの協働なしに自分自らの力によつては創造することができなかつたのか、といった疑問が呈されよう。たしかに、この間の事情の眞の理由を知る者はひとり神のみであるはずだが、(人間の認識能力の範囲内で)蓋然的な推量にとつて説得力もあり理にかなつた理由を明らかにしておかなければならない。それは、例えばこう言える。(七三)つまり、この世にあるものの中にあつては、まず、徳にも悪徳にも与らないものがあり、例えば植物と知性を欠く動物がそうである。というのも、植物の方は、魂を持たず、生来表象力を欠いており、動物の方は、知性や分別を所持していないからである。知性と分別は、言ってみれば、徳と悪徳が本来そこに宿る場である住処のようなものである。さらに、一切の悪徳とかかわらずただ徳とのみ交わっているものがあり、星辰がそうである。というのも、星々は生き物、しかも知性を備えた生き物であるといわれているばかりか、むしろ、一つ一つの星が知性そのものであつて、それぞれどの点から見ても高潔であり、いかなる悪も受け入れることはない。また、徳・悪徳両方の本

性に属するものがあつて、それが人間である。人間は思慮と無思慮、節制と不節制、勇氣と臆病、公正と不正、つまり、善悪、美醜、徳悪徳という正反対のものを受け入れるのである⁽¹⁷⁾。

(七四)ところで、万物の父である神にとって、ただ自分一人で創造するのに最もふさわしいものは高潔なものであり、それは、自分と同族であるためである。また、善悪にかかわりを持たないもの(＝動植物)も同様であつて、それは、これらが神にとって忌むべきものである悪徳に与つていないからである。だが、善悪両性を具有するものにあつては、神にとって、創造するにふさわしい面と、ふさわしくない面とがある。人間にはすぐれたアイデアが混入されている点からすれば、神の創造にふさわしく、他面、それと反対の劣つたアイデアが混ざり込んである点では、ふさわしくないのである⁽¹⁸⁾。(七五)それゆえ、人間の創造に際してのみ、神は「われわれは」造ろう」(創、一・二六)と言つた、と述べられている。これは、神がいわば協働者として自分以外の他のものの協力を仰いだことを示し、その意味するところは、公正な人の非の打ちどころのない意志や行為は、万物の宰領者たる神に帰せられ、これに反対の意志や行為の責めは、神に従属する他のものたちにある、ということである⁽¹⁹⁾。というのは、父は子に対し悪の原因ではありえないからであり、人間の悪心とそこから発現する行為こそが悪なのである。

(七六)さらに、モーセが、この「類」を「人間」と呼び、「男と女が造られた」と述べて(創、一・二七)、この「類」を男女の二つの「種」に分けたことは、まことに當を得たことである。このときまだ男女の二種は形を取るに至つてはいないのだが、モーセがこう取つたのも、種の中でも最も近い種(＝男女の二種)は、「類」(人間)に含まれており、モーセのような眼識を備えた人士には、あたかも鏡に映るがごとく見えるからである。

(七七)さて、なぜ人間が世界の創造の最後のものであるのか、その理由(原因)を追求する者もあろう。というのも、聖書に示されているように、父なる創造者は、他のすべてのものの後に人間を造つたからである。

例えば、律法にいやがうえにも沈潜し、律法の内容を可能な限り限なく精査探究する者のなす説はこうである。すなわち、神は、自己と同族である印として、最善の賜物、つまり理性を人間に分け与え、さらに他の何ものも惜しむことなく、最も神に近しく親愛な生き物としての人間に、世界にある一切のものをあらかじめ用意してやつた。というのも、神は、人間が生まれた後、ただ生きるだけでなく善く生きるにも必要なものが何か欠け、人間が困ることのないようにと思つたからである。ただ生きるためには、快樂にかかわるものが豊かに惜しみなく用意されて

いるが、善く生きるためには、天空の諸事象を観想することが準備されている。この天空の観想に駆られて、知性は、天空の諸事象への知を渴望し愛する。そこから愛フィロソフイア知グノシスというものが芽生え、それにより人間は死すべきものでありながら不死に与ることになるのである。(七八)たとえて言えば、客をもてなす場合、主人はもてなしに要するもの万端を準備し終えたうえで客を食事に招じ入れる。また、闘技会を催したり芝居をかけたりの場合には、主催者は、観客を競技場なり劇場に入れるに先立って、闘士や見せ物や聞き物一通りを案配するものである。それと同様に、万物の宰領者である神は、いわば客をもてなす主人や見せ物の主催者のように、人間をご馳走と見せ物とに招こうとして、それに必要なものをあらかじめ準備したのである。それというのも、人間がこの世に生まれるや否やただちに饗宴とこのうえなく聖なる劇場とを見いだすようにと、神は配慮したからであつた。つまり、その饗宴には、人間の使用と享受に資するように大地や川や海や空がもたらす一切のものが満ち、また聖なる劇場には、あらゆる種類の見せ物が満ちている。その見せ物とは、驚嘆を絶した本質と驚嘆を絶した性質を持ち、さらに秩序ある配列と数的な比例関係と周行のなす響和を備えた運動と輪舞を有しているのである。これらすべてのうちに、原型であり範型である真の音楽ムジカ・ヴェラがあると云つても、誤りではないであらう。後代の人間たちはこの音楽から似像を（くみ取り）自己の魂のうちに描き出し、生に不可欠できわめて有益な技術を伝えたのである。

(七九)さて、以上が、なぜ人間が万物の最後に創造されたと考えられるかということの理由の第一である。だが、第二の然るべき理由を述べなければならぬ。人間は、誕生と同時に生に必要な一切のものを見いだしたわけだが、このことには後世の者たちへの教えが込められている。つまり自然は、言ってみれば、後世の人間が人類の始祖を模倣しながら、必需品を惜しみなく豊かに与えられて労苦もなく日々を送れるであらう、と叫んでいるのである。ただしそれには条件がある。魂の非理性的欲望が支配権を握って、食欲が募り性欲が煽られたりすることがなく、また名誉や金銭や権力に対する欲望が生活の支配権を奪つたりすることもなく、また苦痛が分別の力を抑えねじ曲げることもなく、また悪しき助言者である恐怖（心）が有徳な行為への意欲をそぐこともなく、さらにまた、無思慮や臆病や不正やその他枚挙に暇ない諸々の悪徳が魂に居座ることがないということが必要なのである。

(八〇)ところが現に、今挙げたような悪徳のことごとくがはびこり、人間たちは見境もなく諸々の情念や口にするものはばかりか、生活に不可欠なもので罪深い欲望に身を委ねているありさまなので、神を畏れぬ所行に報いる相応な罰が下されているのであって、生活に不可欠なものの得難いこ

とがその罰にはかならない。つまり、人間は苦勞して野を拓き、泉や川から水路を導き、種を蒔き育て、倦むことなく毎年昼も夜も大地を耕す者の勞苦に耐えて食料を收穫する。だが時として、様々な原因のために收穫が乏しく十分とは言えぬ場合もある。例えば、打ち続く雨で大地は萎え、ずしりと重い雹の襲来に作物は打ち砕かれ、雪に凍え、強風に煽られて根こそぎにされたりする。雨や風は過度にわたれば穀物の不作を惹き起こすからである。(八一)だが、もし、^{パトス}情念に発する過度の衝動が節制によつて抑制され、悪行への熱中や名譽欲が正義によつて、さらに、諸々の徳やそれらに則つた活動によつて惡徳とそれに基づく空しい活動が抑制され、内心の葛藤という戦いの中でもまさしく苛酷極まりない戦いが終息し、平安が訪れ、われわれの持つ種々の能力間に秩序ある状態が平穩裡にもたらされるならば、徳を愛し美を愛しさらには人間を愛する神が、人間の種族に自然に生ずる豊かな実りを遲滞なくもたらしてくれる望みがあるだろう。というのも、農耕の技術を用いずに現にあるものから実りを神に惜しみなく与えてもらうほうが、現にないものを作り出すことよりもいっそう容易なのは明らかだからである。

(八二) 第二の理由は以上に述べたこととして、第三の理由は次のようなことである。

神は、生まれたもの(被造物)が同族でごく近い關係にあるように、被造物の初めと終わりを調和させようと思つて、初めに天を、終わりに人間を造つた。一方は、感性界のなかにあつて不滅なもののうち最も完全であり、他方は、大地より生まれ滅び行くものの中で最善である。真実を語るならば、人間は小さな天であつて、己のうちに星に似た様々な本性を神像を担うがごとく蔵している。それは、諸々の技術や學問や個々の徳に關して語られてきた名だたる言伝えに示されている。それゆえ、滅び行くものと不滅なものとは本来相反するものなので、それぞれの種族のうちで最も優れたものを初めと終わりに配したのである。こうして神は、上述のように、初めに天を、終わりに人間を造つたのである。

(八三) 以上に加えて、人間の創造が最後にならざるをえない理由を示すものとして、なお以下のことも挙げられる。

生まれるもの(被造物)すべてのうちで、人間が最後に生まれざるをえなかつたのは、人間が最後に突然現れ出て人間以外の他の生き物たちに驚異の念を起こさせるためであつた。それというのも、生き物たちは人間を目にするや否や驚きの余り、まるで本来の主人であり指導者である者に対するかのように平伏する定めにあつたからである。したがつて、生き物たちは人間を見るとなべてことごとく馴れ従い、生来最も馴れにくい動物も人間を見るや最も馴れたものとなり、互いに対しては野生の凶暴さをあらわにしても、人間に対してだけは温順なのである。

(八四) こうした理由から、父なる神は、人間を本性上支配的な生き物として生んだのだが、実際そうしただけでなく、神は、言葉で示すことによっても(創、一・二六)、人間を、月下の一切の生き物、陸に棲むもの・水に棲むもの・空に棲むものの王たる地位に据えたのである。つまり、神は、土・水・空気の三要素からなる死すべきものとごとくを人間の支配下に置いたのであるが、天にあるものは人間よりいつそう神的な宿命^{モイラ}を分け持っているのです、それらは除外した。人間の支配的地位のすこぶる明白な証拠は、次のようなよく見られる事実である。つまり、群れをなす多くの家畜が誰かただ一人の人間によって率いられるような場合、その人は、武器も携えず、何ら身を守るすべも持たず、ただ身を覆う皮衣と指図したり道々疲れたときにもたれるための杖を持っているだけでそうしているのである。(八五)現に、羊や山羊や牛など多くの動物の群れを率いているのは、一人の羊飼いや山羊飼いや牛飼いである。彼らは、体は強くもたくましくもないが、人間としての見事な体つきのために、自分を見る動物たちに驚きを惹き起こす。そして動物は、身を守るための備えを自然から与えられて持っているおかげで、それほど備えがよくあれば頑健で力強いにもかかわらず、まるで奴隷のように人間に平伏し、命じられたことをなすのである。雄牛は、大地を耕すために軛につながれ、昼間中、時には夜に及ぶまで深く掘って畝を作り、一人の農夫に駆り立てられて長いこと働き続ける。雄羊は、ふさふさした長い毛に覆われており、春になると、羊飼いの命ずるままにじつと立っているか、おとなしく横になって毛を刈ってもらう。羊たちは、まるで都市が毎年の税を王に納めるように、羊毛を主人である人間に納める習わしである。(八六)さらに、動物のうち一番気性の激しい馬でさえ、飛び跳ねて抗わないようにと、人が轡を付けると容易に応じ、乗り手が乗りやすいように十分背をこごめ、乗り手の人間を背に乗せると非常な早足で、人が急いで行こうとしている場所に着こうとしきりに走っていく。乗る人の方は、馬の体と足のおかげで苦勞もなく安穩無事に旅程を終えるのである。

(八七) さて、人間の支配を逃れて自由に振舞えるものなど何もない、ということの証明のためにさらに贅言を費やそうと思えば、他にも多くを語りえよう。しかし、以上に述べたことでも、証明するには十分であろう。ただし、これだけは銘記しておかなければならない。すなわち、人間は万物の最後に生まれたということだけで、その地位が劣っているということが意味されるわけではない。(八八)その証拠には、御者と舵取の例がある。御者は、軛につないだ動物の背後に回りその後ろに位置して、手綱を取り、思うがままに動物を操っていくもので、速く走らせようとして手綱を緩めたり、必要以上に速く走ろうとすれば、手綱を引き締めたりする。舵取はといえば、船の最後尾の艫にあつて、乗船者す

べてのうちでいわば最高の地位にある。というのも、彼は船と乗船者たちの安全を自らの手中に収めているからである。つまり、創造者は、万物の最後に人間をいわば御者や舵取として創造したのであり、それというのも、人間が、第一にして最大の王である神のいわば代行者のようなものとして配慮の労を取り、地上の生き物や植物を御したり、舵取りしたりするためである。

〈訳注〉

- (1) 二〇節参照。フィロンは、イデアのいわば「場」として、しばしば神のロゴスに言及することがある。
- (2) フィロンは、『七十人訳聖書』(LXX)中の「創世記」一・六で用いられている〈στερέωμαι〉という語(この語は「天空」という意味ではユダヤキリスト教の伝統に属する著作の中でしか用いられない)を、「固体」を意味するギリシア語〈στερεών〉と結び付け、聖書に記された二日目の「おおぞら」の創造が可視的世界の創造を意味している」と解釈する。
- (3) LXX, Gen. 1, 8. "... καὶ ἐκάλεσεν ὁ θεὸς τὸ στερέωμα οὐρανοῦ. "
- (4) 〈συναγωγὴ〉と〈ὄρασις〉を結び付ける語源解釈はプラトンの『クラテュロス』(396B7-C3)『国家』(VI, 509D1-4)にみられる。三六一三七節については、『ティマイオス』(31B-32C)の宇宙の構築に関する叙述の影響も指摘されている。ただし、『ティマイオス』の当該箇所における〈συναγωγὴ〉は、宇宙全体をさすのに対し、その一部分としての天空を意味している。cf., D. T. Runia, *Plato of Alexandria and the TIMAEUS of Plato*, Leiden, 1986, pp. 178-179.
- (5) 「創世記」一・九参照。
- (6) 「創世記」一・一〇参照。
- (7) Cf., Plinius, *naturalis historia*, XVII, 2. cf., Müller, p. 203.
- (8) フィロンはストア的な「種子的ロゴス」(λόγος σπερματικός)の概念を取り入れているが、ここでの用法をみる限りでは、それは可視的世界の自然の再生の過程に関してだけであって、神自身による創造を説明するために用いているわけではない。cf., D. T. Runia, *op. cit.*, p. 422.
- (9) ここで用いられている動詞〈δολιχέτερον〉は、競走用の直線コースを意味する名詞〈δολιχόν〉から派生したものである。長距離レースの場合、この競走路を何度も往復した。フィロンは自然の再生の過程をそれになぞらえている。
- (10) フィロンはこの解釈(Runiaによれば"paedeutie")は、神は自己の全能を示すために太陽と月よりも先に植物界を造ったという、〈Midrasch Tadshe〉にみられる見解の端緒となった。cf., D. T. Runia, *op. cit.*, p. 201.
- (11) フィロンは神的知である〈σοφία〉と星々の運行に関する知識〈σοφίστρια〉を区別しており、そこには星辰信仰に対する批判が含蓄されていると考えられる。

- (12) この部分は聖書にはない。
- (13) フィロンは「しほしほ神を」御者」(ἡγούμενος)を「舵取」(κυβερνήτης)になぞらえる。例えば「御者」については『de somniis』I, 157, 「舵取」については『de Specialibus Legibus』I, 224; II, 181, 『de somniis』I, 157参照。
- (14) 一三節においては「六」日間の創造との関連で「六」が完全数として言及されている。
- (15) 「十」を<πεντάκλεια>とする見解は「ユダヤキリスト派にみられ、フィロンもそれを依拠していると考えられる」cf., 『de decem oracul.』, 746f., Nicomachus Gerasenus, *arithmeticæ introductio*, II, 7, 1-3. καὶ τῶν ἡμερῶν ἀναλογίαν」との対比において「εὐτελέχεια」と重ね合わせ用いられると考えられる。また「完全数としての「四」と「十」との対比は『de plantatione』123-125にみられる。
- (16) 例えば十進法を想起せよ。
- (17) ここで言及されている響和の比は次のようにまとめられている。

$$\delta\acute{\alpha}\lambda\alpha\ \tau\acute{\epsilon}\sigma\sigma\alpha\rho\upsilon\ (\text{完全4度}) - = \frac{3}{4} = 4:3\ \epsilon\pi\iota\rho\upsilon\rho\tau\omicron\varsigma$$

$$\delta\acute{\alpha}\lambda\alpha\ \nu\acute{\epsilon}\upsilon\rho\epsilon\ (\text{完全5度}) - = \frac{3}{2} = 3:2\ \eta\mu\acute{\iota}\omicron\lambda\omicron\varsigma$$

$$\delta\acute{\alpha}\lambda\alpha\ \pi\alpha\sigma\sigma\alpha\upsilon\ (\text{オクターブ}) - = \frac{2}{1} = 2:1\ \delta\iota\pi\lambda\acute{\alpha}\tau\omicron\varsigma$$

$$\delta\acute{\alpha}\lambda\alpha\ \delta\iota\alpha\tau\acute{\alpha}\sigma\sigma\alpha\upsilon\ (\text{2オクターブ}) - = \frac{4}{1} = 4:1\ \tau\epsilon\tau\pi\alpha\kappa\lambda\acute{\alpha}\tau\omicron\varsigma$$

フィロンは「四」以外に「七」についてもその完全性を音楽上の響和の比と結びつけて説明している(九五、一〇七節参照)。なお、フィロンはとりわけ「七」の持つ意義を重視し、八九節から一一八節をその解釈に充てている。

- (18) 「流れ」と訳した「ῥόσται」は幾何学上の述語。cf., Jamblichos, *In Nicomachi arithmeticam introductionem*, ed. H. Pistelli, p. 57. "(στρωγής) ῥόσται φασίν εἶναι οἱ γεωμέτραι τὴν γραμμὴν."

- (19) Cf., Nichomachos Gerasenus, *op. cit.*, II, 7, 1-3.

- (20) 最初の平方数である「四」に正義を帰するのは、ピュタゴラス派の見解に依拠するものと考えられる。

- (21) *quaestiones et solutiones in Genesis* IV, 110の叙述からも、フィロンが『数について』という論稿を著したことが知られるが、今日では散逸していることが多く、ただその概要は『Stahle』247で再構成されている。cf., K. Stahle, *Die Zahlenmystik bei Philon von Alexandria*, Leipzig · Berlin, 1931, pp. 1-18.

- (22) フラトン『テュマイオス』(47A-C)『国家』(VI, 507-509)参照。

- (23) 「二つの円運動」とは『テュマイオス』(36D)にみられる、構成の進行を支配する同の円と惑星の進行を支配する異の円をさすと考えられる。cf., *de Chelbin*, 21-22; *Decalog*, 104; Macrobius, *in somnium Scipionis*, I, 18.

- (24) フィロンはしばしば天体の運行を輪舞にたとえるが、それはピュタゴラス派の見解に基づくと考えられる。ピュタゴラス派によれば、天体の運行においては正しい数の関係が支配しており、それに従って完全な音楽的響和が醸し出されるとされる。
- (25) 天体の回転運動の探求から哲学に到達するという叙述は、*de Aethiopo*, 162, *de Speculibus Legibus*, III, 189にもある。五三節の視覚に関する言及とあわせて、『ティマイオス』(47A-C)の見解に基づいていると考えられる。
- (26) フィロンは占星術を認めているわけではない。占星術は星々の動きや日食・月食を、天候や特定の自然現象だけでなく、人間の運命とも結び付けて予測するが、フィロンは自然現象に関する予測のみを挙げており、ここでの言及はむしろ気象学の部類に属するものといえる。
- (27) この場合の数とは、先に述べられたイデアの数とは次元を異にし、感覚的世界にかかわる具体的数をさす。
- (28) ピュタゴラス派の伝統では、一―点、二―線、三―面、四―立体、五―植物、六―動物、七―人間という対応が言われてきたが、フィロンは聖書の記述にあわせてこの順序をずらしている。
- (29) 動詞〈*uŷkeu*〉は「泳ぐ」という意味であるが、鳥の飛行についても用いられる。また、鳥と魚はしばしば比較対照される。例えばアリストテレスは、羽毛と鱗(『動物部分論』VI, 644a21、『動物発生論』III, 782a18)、翼と鱗(『動物発生論』713a10)を対比している。
- (30) 古代においては、魚は他の獣よりも低い階層に位置づけられた。例えばプラトンは、生き物を、人間(男)、人間(女)、鳥、陸棲動物、水棲動物の順に階層づけている(『ティマイオス』90E以下参照)。
- (31) 一三節参照。
- (32) フィロンは、聖書の記述に従って様々な種類の生き物が創造されていく過程と、個々の生き物の生育の過程とを類比的にとらえている。
- (33) アリストテレス『動物発生論』(II, 3, 736b28-30)参照。
- (34) 二五節参照。
- (35) プラトン『饗宴』(249C)参照。
- (36) フリュギアの大地女神キュベレーの従者たちをさし、激しい音楽にあわせて踊り狂ったとされている。この名称は女神に使える神官をも意味し、さらに狂気のごとく踊り狂う人をさすこともある。
- (37) ここで「高潔」と訳した〈*σπουδαίος*〉は、ストア派においては「賢者」を表す語であり、フィロンにみられるストア的倫理観が端的に表出されている箇所である。
- (38) この箇所のみをみると、フィロンがイデアに何らかの階層を措定しているように思われる。フィロンにおけるイデアのとらえ方を検討する必要があると考えられる。
- (39) フィロンは、聖書の「われわれは造ろう」という箇所の複数形を、ここでは字義通りに理解している。

【付記】

ここに訳出した部分は【はじめに】に述べたように、創造の第二日から第六日にあたるが、この後、第七日に関する叙述がなされ、数「七」のもつ意義に

ついでに論述が展開される。そして最後に人間の墮落が述べられて終わっている。フィロンの『世界の創造』の翻訳は、いずれ一冊にまとめて刊行する予定であり、訳語、訳注等いまだ検討中の段階であるが、ひとまず試訳として提示する次第である。